

# AAINews

APPROPRIATE AGRICULTURE INTERNATIONAL CO., LTD.

国際耕種株式会社

〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3 アーベイン平本 403

TEL/FAX: 042-725-6250

E-mail: aai@koushu.co.jp

## マラウイのアグロフォレストリー

マラウイ国シレ川中流域は、同国最大の都市ブランタイア市の北部に位置し、人口密度が高く、都市への薪炭材供給や耕作地の拡大により、森林面積の減少、農地の土壌流出及び生産性の低下が生じている。また、地下水の枯渇など、天然資源の劣化が顕在化しており、元来生活基盤の脆弱な地域住民は一層の貧困状態に置かれている。

こうした中で、今、アグロフォレストリーが注目されている。アグロフォレストリーは食糧作物の増産、林産物の生産・加工・販売による収入向上活動、薪炭材の供給による資源管理に直接結びついており、土壌肥沃土の改善効果、土壌保全及び保水機能回復ならびに地域経済の活性化効果等も併せて期待されている。日本政府はこれまでに「シレ川中流域森林復旧計画調査」を行い、村落天然資源管理計画を策定した。さらに、この計画を遂行するためにはパイロット事業が必須であるとし、昨年 10 月にパイロット事業のための事前調査が実施され、本調査に参加する機会を得た。

シレ川中流域周辺の研究機関においては、アグロフォレストリーに関して極めて積極的な取り組みが行われている。農業省傘下の試験場においては、アグロフォレストリーと組み合わせた不耕起栽培の導入試験等が実施されている。また、ICRAF (International Center for Research in AgroForestry) においては、数種類のマメ科の灌木を利用した実的な手法が確立されており、これらの手法は既に一般の生産農家に対して普及可能なレベルに達している。そして、Oxfam や USAID、EU といった NGO や援助機関の協力の下に普及活動が展開されている。しかしながら、現実にはこれらのアグロフォレストリー技術は、地域住民に対して効率的に普及されるに至っていない。

そこで、本事前調査においては仮想キャラクターを使った村おこしを中心に新しい普及方法の試みを提案している。本事業のニックネームについて現場で話し合っていた際、調査団の案内役を務めていた林業局のスタッフからミシレという名称が提案された。Middle Shire Rehabilitation から考えついた MISHIRERE であり、これは有名なニエレ大統領からも想像できるとおり、人の名前として使える。本事業においては「ミシレおじさん」を地域の篤農家のシンボルとして登場させ、村おこしのための一大キャンペーンをはる。ミシレおじさんは種子の配布もするし、学校に向いて苗畑建設の指導も行うし、婦人会に対して食品加工の指導も行う。特産物が出来ればミシレ・ブランド(ミシレ蜂蜜、ミシレ果汁)として販路の開拓にも貢献する。そうしたことで、仮想キャラクターのもとに住民の参加者意識を高め、オーナーシップを育成し、住民の合意のもとにひとつの流れを作り上げていくことが可能になり、このことは住民達の行動を広く社会的に認知させることにもつながるのではなかろうか。シレ川中流域における「ミシレおじさん」の活躍を祈りたい。

(シレ川のほとりで: 大沼)



ブランタイア郊外の天然林



住民との意見交換会



混植によるアグロフォレストリー

## 草の根型協力を考える ～国際耕種のアプローチ

### 第4回：オマーンにおける現地住民組織との交流

オマーンと国際耕種とは、これまでに開発調査や専門家派遣などを通してかなり深く関わってきている。現在もマングローブ植林・保全関係の開発調査や専門家派遣を実施中である。オマーンは産油国であり、経済的にも比較的恵まれた国と言える。その中で、政府も「オマナイゼーション」(これまでの外国人雇用者に代わって、自国民の技術的自立を図りながら優先的に雇用しようという政策)による自国民の雇用機会の創出、教育・医療関係の完全無料化など国民の生活・福祉向上には力を入れてきている。

一方、これまで我々が強く係わってきた同国南部のゾファール州には、この地域に残る特有の自然環境がある。同地域の山岳部はインド洋からのモンスーンの影響で豊かな自然植生で覆われている。このため、同地域はこの自然環境を活かした畜産業が盛んであり、また近隣湾岸諸国から多くの観光客を集めている。しかし、近年、過放牧などの影響もあり、植生の後退が急速に進行しつつある(AAIニュース2号、13～18号参照)。オマーン政府はこの問題に強い危惧を持っており、補助金助成による家畜頭数の縮小や関係省庁による植林などの対策を計画しているが、住民を巻き込んだ運動形態は取っていない。また、これまでも政府による植生回復のための手段が何度か検討されてきたが、大きな効果を出すには至っていない。

国際耕種では、この山岳部の環境修復・植生回復を地域住民の活動とリンクした形で推進するための交流や情報収集を昨年から行っている。オマーンは上記のように、国全体では生活・福祉などの面で一定の水準を保ってはいるが、地域には経済的に自立の困難な住民も見られる。その一つが、離婚女性である。ゾファール農漁業総局では、このような女性グループの自立の一環として、山岳部での蜂蜜生産に協力している。同地域は *Zizyphus spina-christi*(現地名シダー)の木から取れる高級蜂蜜の生産地である。国際耕種では日本の養蜂技術やオマーンでの伝統的養蜂技術の情報収集を行い、それらを女性グループに紹介している。

もうひとつの活動として、身体障害者組織との交流を通じた森林回復協力を働きかけている。身障者の機能回復の一環に苗の移植などの植林事業を取り入れ、山岳地域の住民との交流を図りながら、地域住民参加による植林・植生回復を行おうというものである。ゾファール農漁業総局も植生回復の事業としての「小規模緑化事業」(1区画 20m×20m に小規模植林を住民の自主的参加で実施し、こうしたプロットを数多く山岳地域に設置しようという計画)を展開しようとしており、国際耕種ではこの事業の第1号として資金提供を行っている。

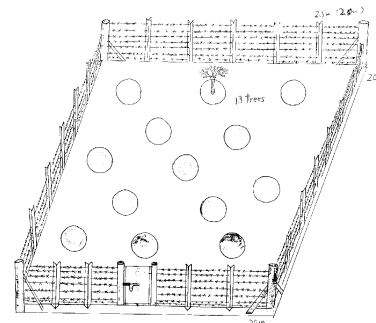
オマーンでの現地住民組織と我々とのこのような形での交流はまだ始まったばかりである。また、時間的な制約もあり十分な交流が行われている段階には至っていない。しかし、このような現場との係わりのある方を模索しながらも交流を持続的に続けることが、地域の人々を理解することとなり、引いては同地域の抱える自然環境保全・植生回復という課題を解決できる一つの糸口になると考えている。オマーン人の持つ地域共同体、相互扶助という豊かな国民性を生かしながら、住民の最大公約数としての子供達の教育、身障者の機能回復、女性活動強化などと植林活動をリンクさせながら、より多方面の住民との協力により地域環境保全に取り組もうと考えている。



サラララにある身体障害者施設



乾期の山岳部



小規模緑化事業計画図

## 開発調査再入門 ～変革期への対応、そして効率的運用とは

### 第4回：農業農村開発調査に求められるもの

近年の農業農村開発に係る援助要請は、小農を中心とする農村の貧困削減を目指した開発や農産物流通システムの整備、農民組織強化等のソフト案件が増加している。こうした要請に対しては、住民参加や持続的開発あるいは地域の資源循環や環境保全にも配慮した計画策定が不可欠となっていることは、本シリーズのはじめに述べた。

限られた時間内に対象地域内の住民の意向を把握しなければならない開発調査というスキームにおいて、PRAやPCMワークショップといった住民参加型手法を導入してはいるものの、実際には計画したワークショップ等を期間内にこなしているといった場合も多い。こうなると参加型という名のトップダウンに他ならず、事業の持続性やオーナーシップの醸成に繋がらない場合もある。現場における真のニーズを探り、ワークショップ等で話題になった内容をより深めるには、地域住民との膝と膝をつき合わせた話し合いや、場所によっては酒を酌み交わしながら本音で話し合うといった機会がどうしても必要になる。さらに、現場からの声を基に調査団員間でワイワイガヤガヤと意見交換を行うこと(ワイガヤ方式)が極めて重要な意味を持つ。以下は、開発調査という制約の中で形にとられない調査や計画策定のために工夫してきた例である。

これまでに国際耕種が関係した農業農村開発調査のうち、ラオスでの「メコン河沿岸貧困地域小規模農村環境改善計画調査」についてはAAIニュース29号ですでに紹介した。ここでは、PCMワークショップの実施だけでなく、なるべく頻繁に村に入って食事を伴にするなどして、住民からより詳細かつ本音に近い意見が得られるように努めた。さらに、PDMの内容を盛り込んだ人形劇をミュージカル風に上演し、広く受益農民にPDMの内容を理解してもらうようにも努めた。ブラジルにおいては、トカンチンス州北部地域の農牧業開発を目的とした開発調査に参加し、ここでもPCMワークショップの実施に加えて、既存の農民組織を数多く訪問し、現場の声を聞くことに力を注いだ。さらに、畜産、栽培、流通、環境といった異なった分野の専門家による積極的な意見交換を行い、将来の方向性を模索するといったワイガヤ方式の導入にも努めた。

このように現場における的確なニーズの把握や適正な計画策定には、現場での調査手法をはじめ、調査団員の専門分野や派遣期間に関する開発調査のよりフレキシブルな運用が望まれている。プロジェクトによっては、形にとられない住民参加手法を導入したり、必要があれば長期住み込み型の調査を実施することも考えられる。こうすることにより、地域住民の生の声に接する機会が増し、住民の真のニーズを理解することができる。また、思い切って調査団員の数を減らすことも考えられる。団員の数を減らして派遣期間を増やすことにより、より心の通った調査を実施することも可能になる。さらに、これまでのような技術分野別に加えて地域別の専門家といった考え方や、文化社会分野および自然科学分野の専門家の協調作業といった考え方も必要になるかも知れない。また、現場の実状に応じた調査を可能にするためには、よりフレキシブルな予算の執行も必要であろう。このように、案件のソフト化に合わせた開発調査のよりフレキシブルな運用が、今強く求められているのではなかろうか。



ラオスで実施した人形劇



ブラジルにおける農民組織訪問

## ミニ・シリーズ:農に関わる営みと暮らし ～日本における様々な動き～

### その1: 帰農、そして農楽—農業を営む若者、就農を志す若者

我々の身の周り、衣・食・住において高度経済成長・バブル景気などによって非自然的な方向に振れ過ぎてしまった振り子が反作用で戻る動きが昨今加速している。農という視座からも同様であるが、それらは本来人間が持つ動物的本能に基づいた危険回避をとる行動からきているのではないだろうか。農・林・水産といった第一次産業が主役の時代が再び少しずつ戻りつつあることを感じさせる。本ミニ・シリーズでは、農におけるそのような動きの一部を紹介していく。崖上から転落し未来への展望を未だ拓けずにいる日本のそれは、今後、途上国が進むべき道において同じ轍を踏まないための重要な視点を与えているように思う。

貨幣経済に基づいた第二次・第三次産業が主流となった今の日本社会の行く末に不安を感じた若者達が、都会を脱出し農村を目指す動きはいまや稀ではない。人間・社会関係の中において現金を稼ぐ労働を捨てて、生きるために自ら食うものを作る農耕労働を目指そうとしている。過疎地において元気に生きる若者達が全国にいる。山口県柏村に住む宮田正樹氏、36歳。9年前に戸数6戸のこの村に就農した。標高300mにある3反8畝の棚田で無農薬無化学肥料栽培の米を作り、野菜を自給し、450羽の平飼い養鶏の自然有精卵により生計を立てる小規模農家である。就農当初から思うような稲作ができず、ヒヨコがネズミに襲われたり、米や鶏卵の販売ルートの開拓など決して楽な道のりではなかったという。現在も棚田を荒らすイノシシに頭を悩まし、沢水に頼る棚田への夏場の水の供給や、管理が行き届かず荒廃の進む裏山を憂う日々が続く。しかし、集落の奥が行止りで道行く人々も少ないため騒がしい人工音は皆無であるし、早朝、下の谷からモクモクと雲が沸き上がるさまは実に感動的である。納屋と蔵に挟まれた藁葺きの民家を住まいとし、薪で風呂を焚き、生活水を井戸水で賄い、裏山から食材を採ってくる暮らしは、必要以上のお金を必要としない本来の豊かなそれであろう。「ここへ来て本当に良かった。そして、ここを訪れる人にも自分の故郷のように感じてもらいたい。」と彼は話した。

将来、農業を目指す若者達が集まり共に学ぶ場「帰農志塾」<sup>きのうしじゅく</sup>は、栃木県烏山町にある。1982年、戸松正氏が日本農業の後継者を育てることを目的として設立し、現在は長男の光生氏(31歳)が塾長を務め、これまで70余名が卒業し全国で就農している。およそ8haの畑で有機・無農薬栽培で約80種類の野菜と平飼い養鶏(約600羽)を主として営み、150世帯の宅配会員と提携する他、スーパーやデパートへも出荷する。塾は研修費不要の全寮制で、研修期間は原則2年間として相互研鑽を目的とする共育を行う。現在は、20歳代前半の男女合わせて10人の塾生が研修を積んでいる。塾生は、圃場において作物生産を行いながら営農栽培技術を学び、圃場外においては配送や集金を行う中で営業・顧客開拓をも任せられ人や社会とのつきあい方を学んでいく。「土と自然と共に生きたい」と願う若者が帰農志塾の門を叩き塾生同士で切磋琢磨しながら共に学び卒業し、就農していく。比較的年齢の若い塾生達は、それなりに悩みや苦労を抱えながらも、その姿は活き活きとしており「ここで学ぶことはとても楽しい。」と笑顔で一樣に答える。都会に住む同年齢の若者には見ることのなかった真っ直ぐに見つめるキラキラと輝いた目と、充実感に溢れた表情や言葉が大変印象的であった。

人間の思想や感情を音で表現する芸術＝「音楽」という言葉がある。それならば農で表現する「農楽」<sup>のうがく</sup>という言葉があってもよいのではないか。我々が貨幣経済社会という枠の中で暮らすために、全くお金と無縁という訳にはいれないが、それでもそれは二の次で、音を楽しむのと同様に自然の中で農を楽しむことが生きるということの第一義であることを彼らは示しているような気がする。



自然有精卵を生む平飼い養鶏



宮田氏が営農する棚田



帰農志塾塾生による野菜苗の植付け